

コラム53:2016 夏 生き物語 (2016年8月)

7月の終わりの、ひときわ暑さの厳しい、昼下がり。僕がハウスの側の事務所から出て、ふと足元を見ると、何か大きな虫が横たわっています。すぐにそれはセミ、それも大型の「アブラゼミ」だとわかりました。腹を上にして地面に横たわり、全く動きません。「どうしてこんな所で死んだるんじやろう？」拾い上げると、パタパタッと僕の手にも絡み付いてくるではないですか。生きているのです！しかし、飛んでゆく気配はありません。かなり弱ってしまって、空に向かって飛び立つような力は、もう残っていないのでしょうか。セミは幼虫で数年間地中で過ごし、地上では一週間しか生きていない、と聞いたことがあります。僕は手のひらの上の生き物を見て、考えていました。「このセミはもう寿命なんかかもしれませんが、どうしたらええんじやろうか」



僕が行ったのは、ウチの庭の片隅にある「山モミジ」です。高さは4mもないくらいの、それほど大きな木ではないのですが、なぜかその木には、いつもセミが4-5匹位は幹にとまっているのです。よほど泊まり易いのか、それとも幹から美味しい汁でも出ているのかもしれません。僕の手の中でしがみ付いているセミを、とり易いように幹の股の所にソッと置いてやります。しっかりと幹をつかん

で止まりましたが、そこから少しも動こうとはしないのです。僕にはそれ以上何もすることが出来ないし、＜彼＞は静かに死んでゆけだけだと思い、その場を離れました。



夕刻に近くなって、もう一度そこに行って見ました。幹のその場所には「あのセミ」の姿はありませんでした。もしやと思い、木の根元の辺りも探してみましたが、セミの死骸もなかったのです。「もしかして、自分で動いたんじやろうか」そんな気がして幹の裏側を覗きこんだ僕は、そこに意外な光景を目にしたのです。「これは一体何！」そこには三匹のセミがいたのです。

一匹は透明な羽をもった大きなセミ、たぶん「クマゼミ」という種類です。そして、そのすぐ側に二匹の「アブラゼミ」。これは奇妙なことに、二匹がお互いの羽を重ね合わせているのです。このことは二つの意味で異様な光景です。まず、クマゼミがこんな低い手の届くような所にとまっていること。このセミは少年時代の僕にとって「あこがれの蝉」で、夏休みの昆虫採集に加えることが難しい種類だったのです。それが家の庭に、手の届くような所にいることが信じられないのです。



もう一つの不思議は、互いの羽を交叉させた二匹のセミの姿です。これって「交尾」(!)という状態ではないですか？僕は生まれて初めて見ました。炎天下の真夏の空の下での、セミたちの「性の営み」。僕はセミが短い一生を終える姿と、これから新しい生命を生み出す姿を、同時に見たこととなります。デジカメに彼らの姿を収めると、僕は静かにその場所を離れました。それにしても、あんなに至近距離で写真を撮って、あの三匹のセミたちは、どうして逃げなかったのでしょうか。後で考えると、それも不思議なことでした。

僕の家の中に古い池があります。こう言うと必ず誤解を受けるので、あらかじめ断っておかないといけません。この池は、いつも大きな鯉が泳いでいるような、りっぱな池ではないのですよ。広さは3坪位ですが、いつも水があるというわけではありません。5月から9月の間で、田んぼに水がある時だけに、何処からか水が湧き出てくるという、「季節限定」の古池というわけです。大きな石に囲われている、濾過された田んぼの水の「たまり場」、と考えてもらうくらいがいいでしょう。



この池には鯉が飼われていない代わりに、ウンと昔から住んでいる「原住民」がいます。「サンショウウオ目イモリ科の両生類」のイモリです。「どんなモンかわからんよ」ですか？都会では見かけることが少ないのでよく知らない人も多いかもしれません。体長は5cm位ですかね、トカゲに似た形で、全体に黒くて、腹は赤くて斑点がありますね。僕にとっては、とても愛らしい(?)生き物ですが、よくよく顔をみると、「小さな恐竜」といった凶暴な面構えをしていますね。



僕が小さい頃には、すでに生息していましたから、幼少期の僕にとって、イモリたちは、格好の「遊び相手」でしたよ。浅い小さな池ですから、子供にも簡単に捕まえられるのです。沢山捕まえて、「オモチャ」にして、もて遊んでいましたが、不思議と殺したりはしなかったですね。川で掬ってきた魚を池に入れておくと、いつのまにか魚が消えているということがよくありました。これはイモリの仕業であると、いまだに信じています。



鬱蒼と茂った樹木で真夏の日差しは遮られ、池のほとりは静かで冷涼な空間が生まれています。僕は少年の頃、ここでボンヤリと池のイモリを見ているのが好きでした。彼らがいるのは、ほとんど水の中ですが、あまり激しく動く生き物ではなく、時折水面に顔を出して「息継ぎ」をして、すぐに水底に戻って、ジッとしています。両生類ですから、浅瀬を這っていることもありますね。

その時、池の隅で激しい動きがあるのに気が付きました。10匹くらいのイモリが団子状になって、何かを奪い合っているようです。それはミズ状の「獲物」をめぐる争いだと、すぐにわかりました。赤い腹を振じらせるようにして、何匹かが餌に食らいついています。しばらく眺めていましたが、当分の間、終わりそうにはありません。全く音のない静寂の世界、小さな池の底で、「生き残りのためのバトル」は、いつまでも続けられていました。

イモリたちはいつからこの古池に住んでいるのか？今年90歳になった母に聞いても、はっきりとしたことはわかりません。ここに家が建てられたのは戦前の昭和14年頃ということですが、「その時には、この池がもうあったんよ」というのですよ。もしかしたら、とんでもなく古い時代から彼らはここに住んでいたのかもしれませんが。イモリが「準絶滅危惧種」に指定されていることを、最近になって知りました。彼らが生きつづけてゆくための環境が、急速に消滅しているということでしょうか。

毎朝 6 時半に「一人ラジオ体操」を続けています。習慣的に西側の山の鉄塔に向かって立つのですが、以前は目の前にどこまでも田んぼが広がり、遠くの山並みが見えていました。そして体操をしていると、僕の目の前の空き地には、いろんな生き物がやってくるんです。いろんな種類の鳥たちもやってきます。体操をしている 10 分の間、ずっとツバメが何羽も旋回を繰り返している、などという不思議なことも以前にありましたね。ここには、カエルやバッタやいろんな生き物がひそんでいるからでしょう。

不思議な「野良猫」もやってきました。どうしてノラネコなのかというと、いつも何か餌をさがしていて、首輪をしていないので、僕が勝手にそう判断したのですよ。体操をしていると、＜彼＞はなぜか近くに来て、ポツンと座っているのです。その距離は 4 m くらい、それ以上には近づきませんし、逃げることもありません。僕は以前のコラムで書いているように「イヌ的性格」の「ネコ好き人間」です。それゆえ決して追いかけたり、コチラから危害を加えるようなことはしません。同時に決して餌を与えるというようなこともしません。僕はそれが、ワンちゃんと暮らしているゆえの「けじめ」だと思っていますし、＜彼＞の方もそんなことを求めてこないのです。僕の事を好いているというより、「安全な人間」と認めて、近くにいただけなのでしょう。



いつも忙しく草むらの何かを追っていることが多いのですが、ある時に地面の土を激しく掘っているのを見かけたのです。僕がすぐ近くで見ていることなど気にもしていないようです。いきなり土の中からネズミのような生き物が飛び出しました。＜彼＞が素早く噛みつく、それっきり動きません。彼は側に座ったまま、前足を舐めるような動作をしています。「顔を洗う」という猫特有の仕草です。それはまるで見ている僕に向って、

「ドヤ顔」で自慢をしているように見えました。こんなことを言いながら…「どうや、こんなんチョロイもんよ」。＜彼＞が仕留めた獲物を咥えました。その時、その獲物の手の形で、正体がわかりました。それは大きな「モグラ」だったのですよ。安全な場所で食すべく、＜彼＞はゆっくりとした足取りで去っていきます。その姿は「ノラネコ」というより、獲物を捕らえた「野生のライオン」の風格がありましたね。



広々とした風景は二階建ての住宅に遮られ、今は以前の半分も見えなくなりました。半年後には全く山が見えなくなり、住宅が壁のごとく立ちふさがっていることになるでしょう。大きかった空がだんだんと小さくなってゆく、という寂しさを感じますね。

コラム46(2015 私の農業)の中で書いていた同級生の M 氏が、今年で稲作をやめるようなら、近くの田んぼがすべて住宅地となり、古池の水は枯れてしまうでしょう。イモリの生息地も「風前の灯」という状況で、今年限りで彼らの姿は見れなくなるかもしれません。最近、小鳥たちを見かけることが少なくなりました。ノラネコの＜彼＞だけは、ときおり姿を見せてくれます。



「何をしとるんかって？」

家や道路ばかり増えるのが気に入らんけえ、

ウチはコーギーしとるんよね！

許さへんで！」

(コーギー犬のベリーちゃんでした)

< 付録 >

神戸に住む子供達がやってきました。

「なんや、けったいな虫おるで」



「ウワ！動いとるやんか！」



「ママ～コワイよ～」



(カミキリムシの独り言)

「ワシは、なーんも悪いことしとらんのに、
どうして嫌われるんかのう……」